



Title	キャビネットメーカーズギルド展における家具デザイナーとキャビネットメーカーの協力関係について
Author(s)	多田羅, 景太
Citation	デザイン理論. 2020, 76, p. 55-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キャビネットメーカーズギルド展における家具デザイナーとキャビネットメーカーの協力関係について

多田 羅 景 太

キーワード

デンマーク, キャビネットメーカー, 家具デザイナー, コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルド展

Denmark, Cabinet-maker, Furniture Designer, The Copenhagen Cabinet-makers' Guild Exhibitions

はじめに

1. コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会について
 - 1.1 展覧会の概要
 - 1.2 展覧会の記録
 - 1.3 参加キャビネットメーカーの分析
 - 1.4 参加家具デザイナーの分析
 2. 家具デザイナーとキャビネットメーカーの協力関係
- おわりに

はじめに

本稿では、1927年から1966年にかけてデンマークで開催された、コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会（以下、キャビネットメーカーズギルド展）の網羅的な分析を通じて、当時のデンマークにおけるキャビネットメーカー¹と家具デザイナー²の協力関係の変化を明らかにする。それによって、これまでハンスJ. ウェグナー（Hans J. Wegner/1914-2007）³やフィン・ユール（Finn Juhl/1912-1989）⁴など、著名なデザイナーの活動や作品そのものを中心に語られてきたデンマーク家具デザインの歴史に厚みを持たせ、20世紀中頃にデンマークモダン家具デザインが黄金期を迎えた背景を掘り下げることを研究の目的とする。

キャビネットメーカーズギルド展については、これまで先行研究や関連書籍⁵において頻繁に紹介こそされてきた。中でも『職人の技術：デンマーク家具の40年（Håndværket viser vejen: Danske møbler gennem 40år）』は本展覧会最終年の1966年に記念誌として発行されており、図録『デンマーク家具デザインの40年（Dansk Møbelkunst gennem 40aar）』（1987年）と並

本稿は、第235回研究例会（2018年9月29日、倉敷市芸文館）での発表にもとづく。

び本展覧会を知る上で貴重な資料といえる。しかしながらキャビネットメーカーと家具デザイナーの参加数の変化を綿密に調査し、それを基に両者の協力関係の変化にまで言及した研究は管見の限り見当たらない⁶。これまで言及されることのなかったキャビネットメーカーと家具デザイナーの展覧会への関わり方および両者の協力関係に光を当てることにより、当時の文脈に即したデンマーク家具デザインをめぐる状況を再現することを本研究の目的とする。

1. コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会について

1.1 展覧会の概要

キャビネットメーカーズギルド展は、コペンハーゲン家具職人組合が主催した家具の展覧会である。ドイツなどから輸入された安価かつ粗悪な家具に市場を奪われそうになった家具職人組合が、マイスター制度⁷によって長年受け継がれてきた高度なクラフトマンシップによる家具を一般消費者にアピールすることを目的として実施した。第二次世界大戦中も途切れることなく、1927年から1966年の40年間継続して実施されている。

会期は9月下旬から10月上旬にかけての約半月間であり、会場はアクセルボー（1927年）、デンマーク技術研究所展示ホール（1928年～32年）、コペンハーゲン産業協会（1933年～36年）、シャーロットテンボー城（1938年）、工芸美術博物館⁸（1937年、1939年～66年）と、開催年によって異なる。

次に展示形式についてであるが、キャビネットメーカー単位で展示ブースが割り当てられており、椅子、テーブル、書棚、ベッドなど複数の家具をブース内にレイアウトすることで、リビングルーム、書斎、ベッドルームなどに見立てる工夫がなされていた〔図7、8参照〕。

なお、本展覧会はビジネスを主たる目的とした一般的な家具の見本市ではなく、あくまで各キャビネットメーカーの作品発表の場として位置付けられていたようである。そのため展示ブースの写真をもても、値札を一切確認することができない。来場者の反応がよくなければ製品化されることもなく、展示会のために数セットのみしか制作されなかったケースもあった。また、試作品を出展したものの当時の技術では量産化することが難しく、生産技術の進化により近年になって製品化されたケースもみられる⁹。

オープニングセレモニーには、当時のデンマーク国王をはじめ通商大臣、外務大臣などが隣席していた記録が残っており、一般消費者だけでなく王室や政治家からも注目されていたことが窺える〔図1〕。



図1 フィン・ユールがデザインしたチーフティンチェアに腰掛けるデンマーク国王フレデリク9世（1949年）

1.2 展覧会の記録

キャビネットメーカーズギルド展については、その40年に亘る活動を記録した図録『デンマーク家具デザインの40年 (Dansk Møbelkunst gennem 40aar)』(1987年)が存在する。本図録は家具デザイナーであり、インテリア雑誌『モビリア (mobilia)』の編集長としても活躍したグレーテ・ヤルク (Grete Jalk/1920-2006)¹⁰ が中心となって取り纏めたものである。デンマーク語と英語の二か国語併記による展示解説と展示風景の写真によって構成され、キャビネットメーカーズギルド展を客観的な視点で俯瞰する上で最適な資料である。1927年～36年, 1937年～46年, 1947年～56年, 1957年～66年の10年ごとの展示内容を収録した計4巻から成り、最後の展覧会が開催された約20年後の1987年にデンマーク科学技術研究所出版 (Teknologisk Instituts Forlag) より刊行された¹¹。

本研究を進めるにあたり、筆者はこの図録を基にデータベースを作成した。データ作成の対象となった展示ブースのサンプル数は合計1295件に上る。なお各項目は次の通りである。①開催年および展示会場, ②キャビネットメーカー名, ③家具デザイナー名, ④展示スタイル, ⑤主な使用木材。本稿ではこれらのデータを分析することにより、キャビネットメーカーと家具デザイナーの協力関係の変化を明らかにする。

1.3 参加キャビネットメーカーの分析

筆者が作成したデータベースによると、本展覧会が実施されていた1927年から1966年の40年間に合計78名のキャビネットメーカーが参加していたことが明らかになった。一方で参加の頻度にはばらつきが見られ [図2参照], 40年間継続して参加していたのは, A. J. イヴァーセン (A. J. Iversen/1888-1979)¹², アンダース・スヴェンセン (Anders Svendsen/ 生没年不詳), ヘンリック・ワーツ (Henrik Wårts/ 生没年不詳), ヨハネス・ハンセン (Johannes Hansen/ 生没年不詳)¹³ の4名のみである。通算30回以上参加したキャビネットメーカーまで含めると合計13名となり, エアハルト・ラスムッセン (Erhard Rasmussen/ 生没年不詳),

キャビネットメーカーの数 (名)

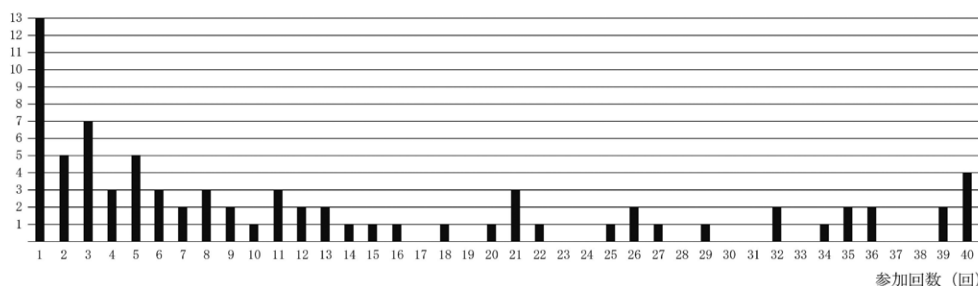


図2 キャビネットメーカーの参加頻度

ニールス・ヴォッダー (Niels Vodder/1892-1982)¹⁴、ヤコブ・ケア (Jacob Kjær/1896-1957)¹⁵ など著名なキャビネットメーカーが名を連ねる。一方で、通算参加回数が10回にも満たないキャビネットメーカー数は、全体の半数以上の43名に上り、中でも一度しか参加しなかったキャビネットメーカーが13名と最も多いことがわかった。

次に開催年ごとのキャビネットメーカーの参加数を図3に示す。初年度の1927年以降、参加者は緩やかな増加傾向にあったが、1938年をピークに翌1939年には急激に減少している。これはデンマークの隣国ドイツが、1939年9月にポーランドに侵攻したことをきっかけとして始まった、第二次世界大戦による社会情勢の混乱が影響していると考えるのが妥当であろう。

デンマークは1940年4月9日から1945年5月4日までナチス・ドイツの統治下に置かれていたが、コペンハーゲンをはじめとする都市部に大きな被害はなく、当初は市民生活にもさほど大きな変化は見られなかったようである。しかし戦争が進むにつれて市民の生活は徐々に厳しくなり、日用品も配給制となった。一方、このような状況下においても木工所には戦前から乾燥目的で保管していた木材がストックされており、戦時中も木製家具であれば継続して制作することができたのである¹⁶。

このように戦時中も中止に追い込まれることなく継続したキャビネットメーカーズギルド展であるが、戦後は25名前後のキャビネットメーカーが参加していたことを図3から読み取ることができる。しかし、1960年代に入るとその数は減少傾向となり、1965年には過去最低の17名となっている。

これは1954年から1957年にかけてアメリカとカナダにある24か所の美術館を巡回した展覧会「デザイン・イン・スカンディナヴィア」や、デンパルマネンテ¹⁷による北欧デザインのプロモーション活動を通じ、デンマークモダン家具デザインに対する世界的評価が一気

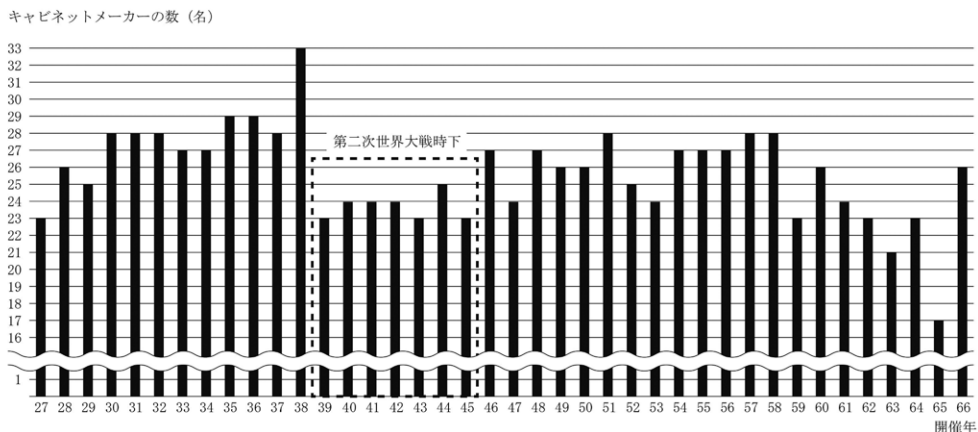


図3 開催年ごとのキャビネットメーカーの参加数

に高まったことが背景にあると考えられる。なぜなら、キャビネットメーカーが経営していた家具工房の多くは20名程度の職人が働く小規模なものであり、国内外からの家具のオーダーが集中した結果、新作を展覧会に出品する余裕が失われたのである¹⁸。このデンマークモダン家具に対する世界的な需要の高まりが、展覧会衰退のきっかけとなってしまったのは皮肉なことだといえる。なお、1966年については、最終年を記念して出品した参加者が多かったと考えるのが自然であろう。

1.4 参加家具デザイナーの分析

データベースによるとキャビネットメーカーズギルド展が実施されていた40年間に、総勢238名もの家具デザイナーが参加していたことが明らかになった。

40年間継続して参加したデザイナーはひとりもおらず、ハンスJ. ウェグナーとオーレ・ヴァンシャー（Ole Wanscher/1903-1985）¹⁹による28回が最多であり、以下、トーヴェ&エドヴァード・キンドラセン（Tove&Edvard Kindt-Larsen/1906-1994, 1901-1982）²⁰の26回、アイナ・ラーセン（Ejner Larsen/1917-1987）の25回、フィン・ユールの24回、アクセル・ベンダー・マッドセン（Aksel Bender Madsen/1916-2000）の23回、ボーエ・モーエンセン（Børge Mogensen/1914-1972）²¹の22回、カート・オルセン（Kurt Olsen/ 生没年不詳）の17回、コア・クリント（Kaare Klint/1888-1954）²²の16回、イブ・コフォード・ラーセン（Ib Kofod-Larsen/1921-2003）²³の15回、カイ・ゴットロブ（Kaj Gottlob/1887-1976）の15回、オルラ・モルゴー・ニールセン（Orla.Mølgaard-Nielsen/1907-1993）²⁴の15回と続く。

一方、本展覧会に一度しか参加しなかった家具デザイナーは全体の半数119名に上り、その数は突出している。また、参加回数が4回以下の家具デザイナーが全体の約8割を占めており、入れ替わりが激しかったことがわかった〔図4参照〕。

次に開催年ごとの家具デザイナーの参加数を図5に示す。まず全体的な傾向として、第二次世界大戦による一時的な影響は確認できるが、図3で示したキャビネットメーカーの参加数とは異なり、40年間を通じて増加傾向にあることがわかる。展覧会開始当初は10名にも満たなかったが、1933年に導入された家具職人組合主催のデザインコン

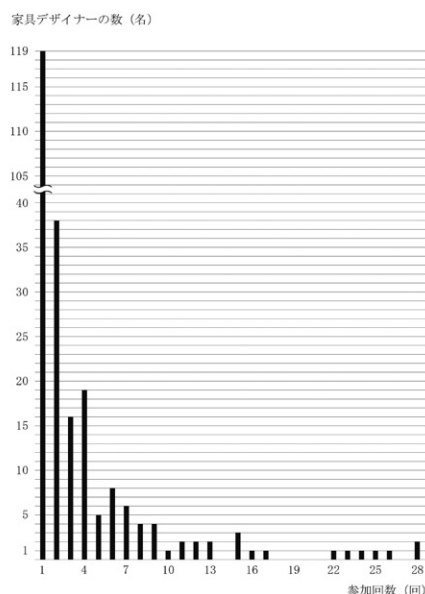


図4 家具デザイナーの参加頻度

ペティションの効果もあり、1938年には27名に達している。翌1939年には第二次世界大戦勃発の影響で約半数の13名まで減少したが、戦時中も家具デザイナーの参加数は増加傾向にあった。そして戦後もこの増加傾向は継続し、1964年と1966年には最多となる34名の家具デザイナーが参加している。

このように家具デザイナーの参加者が増加した背景として、コア・クリントが主導したデンマーク王立芸術アカデミー家具科やコペンハーゲン美術工芸学校における専門教育により、家具デザイナーという新たな職能がデンマークにおいて定着したことが挙げられる。これらの教育機関で家具デザインを学んだトーヴェ・エドヴァード・キンドラーセン、アイナ・ラーセン、アクセル・ベンダー・マッドセン、ボーエ・モーエンセン、ハンス・J. ウェグナーら若手の家具デザイナーが、登竜門として本展覧会に積極的に参加した。

ここで図3と図5を比較すると、キャビネットメーカーの数と家具デザイナーの数のバランスが均等ではないことがわかる。1927年から1947年までの約20年間は、いずれの年もキャビネットメーカーの数が家具デザイナーを上回っている。そして1948年から1957年までの10年間は両者の数がほぼ均等となり、1958年以降は最終年度の1966年まで家具デザイナーの数がキャビネットメーカーの数を上回っている。

本展覧会の主催者はコペンハーゲン家具職人組合であり、展示ブースの数、つまり展覧会に参加できるキャビネットメーカーの数は組合によって調整されていたと考えられる。図3からもわかるように、多少の増減はあるもののその数は概ね25で推移している。なお、キャ

家具デザイナーの数（名）

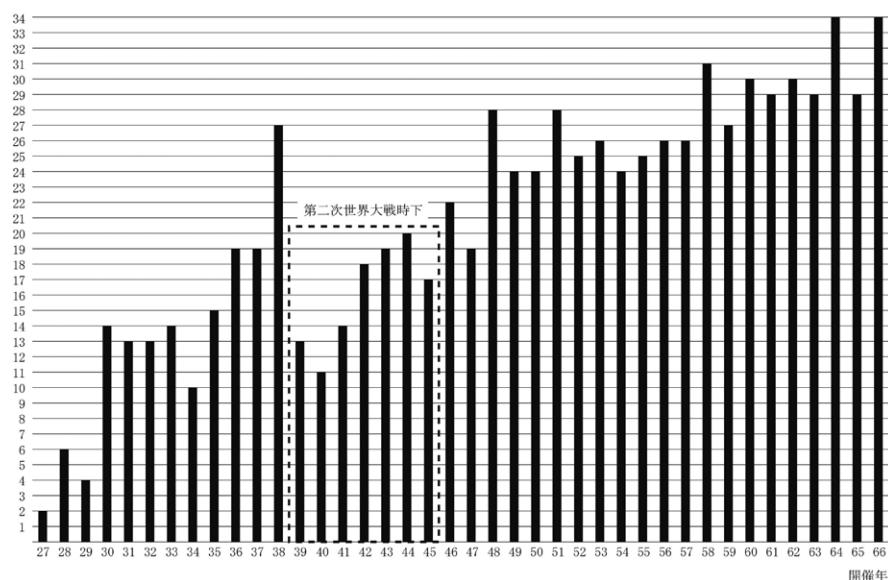


図5 開催年ごとの家具デザイナーの参加数

ビネットメーカーの参加に審査が存在したか否かについては、先行研究や関連書籍においても明らかにされていないが、組合によって管理されていたと考えるのが妥当であろう。

一方で家具デザイナーの参加数は、40年間を通じて増加傾向にあったことからわかるように組合主催のデザインコンペティションに入選するなど、組合が認めた場合は参加することができた²⁵。その結果、1958年以降は家具デザイナーの数がキャビネットメーカーの数を上回るようになり、複数の家具デザイナーによりデザインされた家具を制作、展示するキャビネットメーカーが現れるようになったのである。このように家具デザイナーの参加が増加していった背景として、モダニズムの台頭が挙げられる。この背景については次章で詳述する。

2. 家具デザイナーとキャビネットメーカーの協力関係

2.1 展覧会の概要でも述べた通り、本展覧会はキャビネットメーカー単位で展示ブースが割り当てられていたが、図録『デンマーク家具デザインの40年 (Dansk Møbelkunst gennem 40aar)』も同様の構成となっており、そこにはデザインを担当した家具デザイナーの情報も記載されている²⁶。

筆者はこのデザイン担当者の情報を基に、各展示ブースの作品を「家具デザイナーがデザインを担当 (A)」、「キャビネットメーカーがデザインを担当 (B)」、「(A)、(B) が混在」、「不明」に分類し、それを図3に反映させることで図6を作成した。

まず、展覧会初期の1927年から1929年の状況に着目したい。この時期は図録にもデザイナー不明と記載され、誰がデザインを担当したのかははっきりしないケースが多い。しかし、展覧会初期はキャビネットメーカーと家具デザイナーが協力して出展するケースがあまり定着していなかったことに加え、1930年以降のグラフの動きから推察してもキャビネットメーカー自身によるデザインと考えるのが妥当であろう。

1930年代に入ると、家具デザイナーがデザインを担当し、キャビネットメーカーがそれを制作して展覧会に出展する、つまり両者が協力して作品を作り出すというケースが増加している。1933年以降実施されたデザインコンペティション制度もこの流れを加速させ、両者の協力関係は年を追うごとに活発になった。一方、家具デザイナーと協力することなくキャビネットメーカーが単独で展覧会に参加するケースは徐々に減少していき、1950年代の後半に入るとかなり少数派となっている。

このように、本展覧会が実施されていた40年の間に、キャビネットメーカー自身がデザインも行うケースが縮小し、反対にキャビネットメーカーと家具デザイナーが協力するケースが定着していったことが明らかになった。

ではキャビネットメーカーが単独で出展する場合と、家具デザイナーと協力して出展する

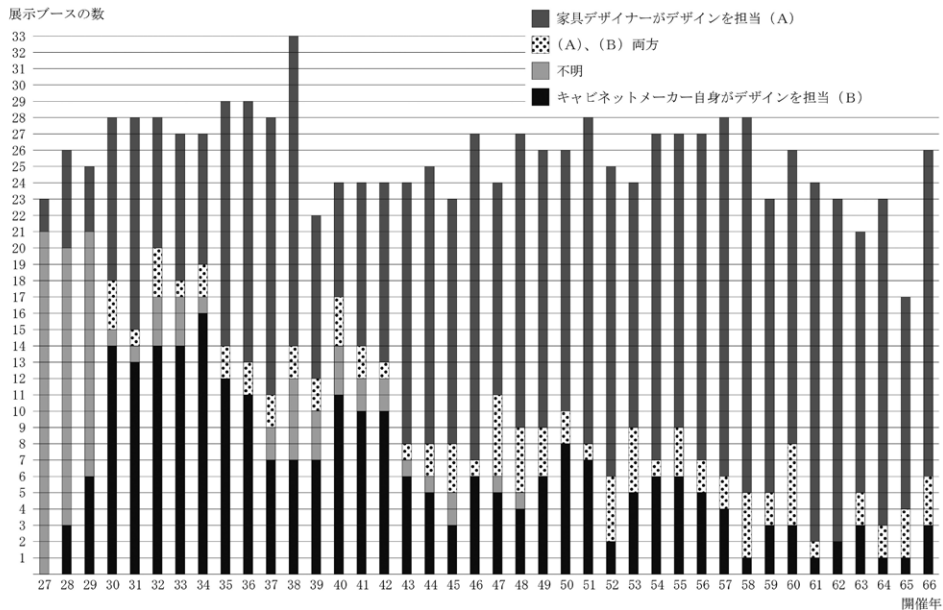


図6 各展示ブースにおけるデザイン担当者

場合において、どのような違いが生じるのであろうか。デンマークモダン家具デザインの父とも呼ばれるコア・クリントの登場によって、1930年代以降、家具デザイナーという職能がデンマークにおいて定着していったことは先にも述べたが、キャビネットメーカーはそれ以前から存在していた。これはコペンハーゲン家具職人組合の設立が1554年であったことから明らかである。

家具デザイナーが登場するより前のデンマークでは、マイスター制度と呼ばれる徒弟制度によって、長年キャビネットメーカーによる高い木工技術が培われてきた。若い職人がマイスターと呼ばれる親方の下で数年間修行し、一人前のキャビネットメーカーを目指して研鑽を積んだのである。腕の良いキャビネットメーカーは主に富裕層向けの家具を作っていたが、富裕層が好んで彼らに作らせたのがイギリスやフランスなどで流行していたスタイルの家具であった。そのため、デンマーク国内での修行の後、イギリスやフランスへ留学して現地で流行していたスタイルを学び、それをデンマークに伝えたキャビネットメーカーも存在した²⁷。

図録『デンマーク家具デザインの40年（*Dansk Møbelkunst gennem 40aar*）』に掲載されている展示風景の写真を確認すると、キャビネットメーカーによってデザインされた家具の意匠的傾向として、彫り物や猫足といった装飾が施された家具が多い〔図8参照〕。キャビネットメーカーの歴史を鑑みると、彼らがこのようなスタイルの家具をデザインしたのは自然なことだといえるが、家具デザイナーによってデザインされたモダンなスタイルの家具〔図7参照〕と同じ展示会場に陳列した場合、来場者の目にはどのように映ったのであろうか。キャ



図7 ニールス・ヴォッダーの展示ブース（1941年）



図8 アナス・スヴェンセンの展示ブース（1942年）

ビネットメーカーによってデザインされた家具は前時代的なものとして捉えられ、一方で家具デザイナーによってデザインされたモダンな家具は、新たなライフスタイルを予兆するものとして注目を集めたことは想像に難くない。

フィン・ユールがデザインを担当し、ニールス・ヴォッダーが制作したペリカンチェアが1941年のキャビネットメーカーズギルド展に展示されているが〔図7〕、デンマークのタブロイド紙B.T.によって次のように批評されている。

展覧会では野暮ったく装飾された展示が多いなか、より軽快なものを提案しようという試みもみられる。例えばフィン・ユールがデザインしたリビングルーム用のイージーチェアは意欲作だといえるだろう。しかし他の出展者はフィン・ユールが送り込む新しい風に対して懐疑的な様子である²⁸。

一方、翌1942年に発表されたアナス・スヴェンセンの展示ブースは〔図8〕、審査員のひとりペント・アストロップによって次のように酷評されている。

インテリア全体がこの展覧会にそぐわない。ビロード、タペストリー、バロックスタイルのイミテーション。優れたクラフトマンシップの無駄遣いであり、全てが良くない²⁹。

このように、新聞などのマスメディアや審査員によってモダンなデザインの家具は歓迎されたが、時代にそぐわない前時代的な家具に対する関心は徐々に薄れていったと考えられる。そして、キャビネットメーカーズギルド展における展示作品も、家具デザイナーによってデザインされたモダンなデザインの家具が大勢を占めていったのである。

モダンデザインを受け入れ、家具デザイナーと協力するというスタイルに移行できたキャビネットメーカーは、その後も継続して展覧会に参加したが、モダンデザインを受け入れる

ことができず、富裕層向けの前時代的な家具づくりに固執したキャビネットメーカーは徐々に展覧会から姿を消していった。

以上のことから、本展覧会が開催されていた40年の間にデンマークでは家具デザイナーという職能が定着し、キャビネットメーカーと家具デザイナーが協力して作品を生み出すというデンマーク特有の家具開発スタイルが成熟していったことが明らかになった。それと並行して装飾が施された前時代的な家具は淘汰されていったのである。

なお、キャビネットメーカーと家具デザイナーの協力関係であるが、家具デザイナーの特性によってその関係性は異なるものであった。ボーエ・モーエンセンやハンスJ. ウェグナーに代表される家具デザイナーとしての専門教育を受けたデザイナーは、若いころキャビネットメーカーとしての修行を行い、自身も木工マイスターとしての資格を取得していた³⁰。そのため木工にも精通しており、キャビネットメーカーと対等な視点で家具の構造や加工方法などについて意見をぶつけ合うことができたのである。

一方、キャビネットメーカーズギルド展には建築家も家具のデザインを提供していたが、彼らの多くは木工の専門知識に乏しかったため、キャビネットメーカーの力を借りる必要があった。中でもフィン・ユールが提案する家具は、彫刻的で浮遊感のある外観が魅力的である反面、構造的に不合理な場合もあり、一部のキャビネットメーカーからは構造音痴と揶揄されていたほどである。しかしながらユールの提案するユニークなデザインに共感した名工ニールス・ヴォッダーの手によって生み出された家具は展覧会で高い注目を集め、後にデンマーク国外でも高い評価を受けた。

ところで、キャビネットメーカーズギルド展が実施されていた40年の間に、数多くのキャビネットメーカーと家具デザイナーによる協力関係が生まれたが、そのすべてが成功したわけではない。家具デザイナーとの協働作業を試みたものの良好な関係を構築することができず、展覧会から姿を消したキャビネットメーカーも多かったのも事実である。

その一方で、家具デザイナーや建築家の特性を見抜き、良好な協力関係を築くことに成功したキャビネットメーカーによる作品は国際的にも高く評価され、デンマークモダン家具デザインの発展に大きく貢献した。以下に代表的な組み合わせ（キャビネットメーカー／家具デザイナー／代表作品）を挙げる。

ルッド・ラスムッセン／コア・クリント／サファリチェア [図9]

エアハルト・ラスムッセン／ボーエ・モーエンセン／スパニッシュチェア [図10]

ヨハネス・ハンセン／ハンスJ. ウェグナー／ザ・チェア [図11]

ニールス・ヴォッダー／フィン・ユール／No.45 [図12]



図9 サファリチェア

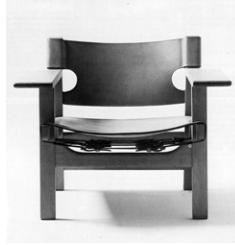


図10 スパニッシュチェア



図11 ザ・チェア



図12 No.45

おわりに

20 世紀中頃にデンマークモダン家具デザインが黄金期を迎えた背景のひとつとして、キャビネットメーカーと家具デザイナーの協力関係が重要であったことは、先行研究において頻繁に指摘されてきた。しかし、その協力関係が展開された中心的な場といえるキャビネットメーカーズギルド展については、総括的な図録『デンマーク家具デザインの 40 年 (*Dansk Møbelkunst gennem 40aar*)』がありながら、著名なデザイナーや作品そのものに注目が集まることが多く、キャビネットメーカーと家具デザイナーの協力関係を探る資料として活用されることはなかった。

今回、本図録を中心にキャビネットメーカーズギルド展の 40 年間の記録をたどることによって、キャビネットメーカーと家具デザイナーの協力関係がどのような背景から生まれ、育まれ、そして開花したか、具体的なデータの分析によって裏付けることができた。また、デンマークにおけるモダニズム運動による影響をデータとして具体的に示すことができたことはこれまでにない成果といえる³¹。

先にも述べたように、キャビネットメーカーと家具デザイナーによる協力関係は全てが成功したわけではない。モダニズムの流れを受け入れることができなかったキャビネットメーカーは展覧会からも姿を消し、後に廃業に追い込まれている。しかし、いくつかの幸福な協力関係から生み出された名作が黄金期を牽引し、国際的に高い評価を受けたことから、キャビネットメーカーズギルド展がデンマークモダン家具デザインの発展に果たした役割は大きかったといえる。

註

- 1 デンマークにおける家具職人に対する一般的な呼称。
- 2 当時は建築家が家具をデザインするケースが多かった。本稿では便宜上、キャビネットメーカーズギルド展に参加した建築家を家具デザイナーという呼称で統一する。
- 3 17 歳で木工マイスターの資格を取得。コペンハーゲン美術工芸学校で家具デザインを学んだ後、アルネ・ヤコブセンとエリック・モラーの建築事務所に勤務し、オーフス市庁舎で使用する家具

- のデザインに携わる。その後独立しフリーランスの家具デザイナーとして活動。生涯で 500 脚以上の椅子をデザインした。代表作はチャイニーズチェア, ザ・チェア, Y チェアなど。
- 4 デンマーク王立芸術アカデミー建築科で建築を学んだ後, ヴィルヘルム・ラウリッツェンの事務所に勤務。1937 年にキャビネットメーカーズギルド展に初参加。1945 年よりフレデリクスベア工業専門学校にて教鞭を執る。1952 年に完成したニューヨーク国際連合本部信託統治理事会議場のインテリアデザインを担当する。代表作はペリカンチェア, No.45, チーフティンチェアなど。
 - 5 以下に主な先行研究, 関連書籍を挙げる。

Erik Zahle, *Scandinavian Domestic Design* (Methuen & Co. Ltd., 1963).

Povl Christiansen, Hakon Stephensen, *Håndværket viser vejen: Danske møbler gennem 40 år* (Københavns Snedkerlaugs Møbeludstillinger, 1966).

Grete Jalk, *Dansk Møbelkunst gennem 40aar/40 years of Danish furniture design* (Teknologisk Instituts Forlag, 1987).

村上太佳子「デンマーク ― 近代の椅子デザインの背景」(織田憲嗣『デンマークの椅子』光琳社出版, 1996)

島崎信『デンマークデザインの国』学芸出版社, 2003

島崎信, 柏木博, 織田憲嗣, 米津誠太郎, 川上玲子『北欧インテリア・デザイン』平凡社, 2004

Klaus Petersen, Per H. Hansen, *300 danske designmøbler* (LINDHARDT OG RINGHOF, 2015).

Mark Mussari, *Danish Modern: Between Art and Design* (Bloomsbury USA Academic, 2016).

Christian Holmsted Olesen, *The Danish Chair: An International Affair* (Strandberg Pub, 2019).
 - 6 拙著, 多田羅景太『流れがわかる! デンマーク家具のデザイン史』(誠文堂新光社, 2019)においても 20 世紀中頃にデンマークモダン家具デザインが黄金期を迎えた要因のひとつとしてキャビネットメーカーズギルド展を紹介しているが, 詳細な言及までは至らなかった。
 - 7 ドイツ発祥の職業能力認定制度。デンマークの家具職人育成システムにおいては工房の親方から実務的な指導を受け, 家具職人組合による夜間授業で工房の経営に関する知識を身に付けていた。
 - 8 現デンマークデザインミュージアム
 - 9 ハンス J. ウェグナーによってデザインされた PP530 は 1954 年のキャビネットメーカーズギルド展にて試作品が発表されたが, 当時の技術では量産が難しかったため製品化は見送られた。しかしウェグナー生誕 100 年を記念して, 2014 年に PP Møbler より製品化されている。
 - 10 家具職人としての修行を積んだ後, デンマーク王立芸術アカデミー家具科にてコア・クリントに師事。1946 年にはキャビネットメーカーズギルド展のデザインコンペティションで入賞。1950 年から 60 年にかけて美術女子学校にて教鞭を執る。デンマークのデザイン雑誌『モビリア (mobilia)』の編集者としても知られる。代表作は GJ バウチェア。
 - 11 初版から 30 周年を経て, 2017 年に Lindhardt og Ringhof Forlag より新装版が出版された。
 - 12 アナス・イエッペ・イヴァーセン。デンマークを代表するキャビネットメーカーのひとり。1916 年に木工マイスターの資格を取得。建築家のカイ・ゴットロブと協力し, 1925 年にパリで開催された万国博覧会に出品し, 名誉賞を受賞。1951 年から 1961 年までコペンハーゲン家具職人組合の役員を務める。
 - 13 かつてハンス J. ウェグナーがデザインした家具を制作していたことで知られるヨハネス・ハンセン工房のオーナー。1990 年頃に廃業したが, ウェグナーの家具の製造ライセンスはデンマークの家具メーカー PP モブラーに引き継がれて, 今なお製造され続けている。

- 14 フィン・ユールの協力者として知られるキャビネットメーカー。ニールス・ヴォッダーによって作られたユールの家具は、近年ヴィンテージ家具として取引されている。
- 15 父親の下で家具職人としての修行を積んだ後、フランスやドイツにも留学した経験をもつキャビネットメーカー。家具デザイナーとしても知られる。代表作は1949年にニューヨーク国連ビルのためにデザインしたFNチェア。
- 16 Esbjörn Hoirt, *Premio la Rinascente Compasso d' Oro – DEN PERMANENTE – Copenhagen* (Segreteria del Compasso d' Oro, 1964), p.74
- 17 1931年にコペンハーゲン中央駅近くのヴェスタポートビルに開設されたデンマーク製品の常設展示場。デンマーク製品の海外マーケットへのプロモーションに大きな役割を果たした。その活動が評価され、1958年にイタリアの国際デザイン賞コンパッソ・ドーロを受賞している。
- 18 島崎信『デンマークデザインの国』, 46頁。
- 19 デンマーク王立芸術アカデミー家具科にてコア・クリントに師事し、家具デザインを学ぶ。『家具様式』(1932年)など、家具研究についての著書も多い。クリントの死後、王立芸術アカデミー家具科の二代目教授となった。代表作はエジプシャンスツールやコロニアルチェアなど。
- 20 トーヴェ、エドヴァードともデンマーク王立芸術アカデミー家具科にてコア・クリントに師事し、家具デザインを学ぶ。キャビネットメーカーズギルド展には1931年にエドヴァードが初出展。1927年にトーヴェと結婚し、以降は夫婦で参加した。テキスタイルやジュエリーのデザイナーとしても活動。
- 21 20歳で木工マイスターの資格を取得。コペンハーゲン美術工芸学校で家具デザインを学んだ後、デンマーク王立芸術アカデミーの家具科に進学しコア・クリントに師事。アカデミー卒業後、デンマーク生活協同組合FDBの家具デザイン室の責任者に抜擢される。キャビネットメーカーズギルド展には1939年に初出展。代表作はJ39、スパニッシュチェアなど。
- 22 父親イェンセン・クリントと建築家カール・ピーターセンの下で建築を学ぶ。1924年よりデンマーク王立芸術アカデミー家具科の講師を務め、後身の育成に務める。1944年には同アカデミー建築科初代教授。クリントが提唱したデザイン方法論は後に活躍したデンマークの家具デザイナーに受け継がれた。その功績が称えられ、デンマークモダン家具デザインの父とも呼ばれる。
- 23 木工マイスターとしての資格を取得した後、デンマーク王立芸術アカデミーで建築を学ぶ。キャビネットメーカーズギルド展には1949年に初出展。1956年に出版したイーギーチェアは、後にイギリスの女王エリザベス2世が購入したことから、エリザベスチェアという愛称と共に彼の代表作となった。
- 24 コペンハーゲン美術工芸学校で家具デザインを学ぶ。複数のデザイン事務所に勤務した後、1942年に自身のデザイン事務所を設立。1944年からはパートナーのピーター・ヴィットと協同でデザインを行うようになった。キャビネットメーカーズギルド展には1933年に初出展。代表作のAXチェアはアメリカに多数輸出された実績をもつ。
- 25 Grete Jalk, *Dansk Møbelkunst gennem 40 aar/40 years of Danish furniture design*, vol.1, p.9
- 26 キャビネットメーカー自身がデザインを行った場合は、キャビネットメーカーの名称、またはby the makersと記載されている。
- 27 村上太佳子「デンマーク ― 近代の椅子デザインの背景」(織田憲嗣『デンマークの椅子』), 6頁。
- 28 前掲註25, vol.2, p.158
- 29 同前, p.174

30 当時、家具デザインの専門教育機関に進学するための条件として、木工マイスターとしての資格を得ておくことが求められていた。

31 紙幅の都合上、今回の論考では、データベースの項目のひとつとして扱った主な使用木材の変遷について言及することができなかった。家具を制作する上で使用する木材は重要な要素であり、消費者の嗜好など時代背景も反映される。データの整理は既に終えており、別稿を用意したい。

図版出典

図 7, 8, 9, 10, 11, 12 : Grete Jalk, *Dansk Møbelkunst gennem 40 aar/40 years of Danish furniture design* (Teknologisk Instituts Forlag, 1987).

図 1 : 織田憲嗣『フィン・ユールの世界 — 北欧デザインの巨匠』平凡社, 2012

図 2, 3, 4, 5, 6 : 筆者作成

Analysis of the Collaboration between Furniture Designers and Cabinet-Makers from The Cabinet-Makers' Guild Exhibitions

TATARA, Keita

Copenhagen Cabinet-makers' Guild Exhibition is a furniture exhibition organized by the Copenhagen Cabinet-maker Association which was established in 1554. The exhibition was started in 1927 to promote furniture made by cabinet makers with advanced craftsmanship. It had run for 40 years consecutively, even during the Nazi occupation of Denmark from April 9, 1940 to May 4, 1945.

The aim of this paper is to clarify how the collaboration between cabinet makers and furniture designers began and evolved through the exhibitions by analyzing the 40-year record of Cabinet-makers' Guild Exhibitions. Published in 1982, *Dansk Møbelkunst gennem 40 aar (40 years of Danish furniture design)* records the exhibition throughout the 40 years. This book was edited by female furniture designer, Grete Jalk (1920–2006), who was also famous as an editor of the major Danish interior magazine, *mobilia*.

In conclusion, there were many old-fashioned furniture designed by cabinet makers in the early years, but after furniture designers participated in the exhibition as design partners, the styles became more modern. Not all collaborations between cabinet makers and furniture designers were successful. As a result, cabinet makers who could not accept the transition to modernism had disappeared from the exhibitions. Some masterpieces created by the partnerships led the golden age of Danish modern furniture design and received international acclaim.